

さかむらしんみん
「念ずれば花開く」(坂村真民)

第6期の『耕人塾』も今日で9回目になります。これまでの「実践活動」、「プロジェクトK」、「宿泊研修」を通じて、たくさんの方の事を学んできました。残された5回の活動をどのような心構えで学んでいくかが大事になります。塾生の皆さんは、学校のこと・部活動のこと・友達のこと・家庭のことなど必ずしも順風満帆(じゅんぷうまんぱん)な時ばかりではないと思います。私も同じで、いくつもの壁を前に挫折しそうなことが何度もあります。そんなとき、「念ずれば花開く」という坂村真民さんの言葉に支えられてきました。坂村真民さんのことを紹介します。

坂村真民さんは1909(明治42)年、熊本県に5人兄弟の長男として生まれました。8歳のとき父が急逝し、母親は女手一つで5人の**子供**を育てます。「念ずれば花開く」という言葉は、苦労を重ねた母親がいつも唱えていた言葉を詩にしたものです。真民さんは長男だったので、幼い弟の面倒を見たり母のお手伝いをしたり、働きものでした。朝は暗いうちに起き



て井戸の水を汲み、父の仏壇に供えていたそうです。中学校時代(現・高校)は往復12キロの道を歩いて通いました。伊勢の神宮皇学館(現・皇学館大学)を卒業し、高校の先生をしながら真実を求めて短歌をつくり、やがて現代詩に転じます。2004(平成16)年、95歳のとき、個人詩誌『詩国』が500号に達し、2006(平成16)年、97歳で永眠しました。多くの作品は、愛媛県にある「坂村真民記念館」に展示してあるのでいつか行ってみたいと思っています。

私がいつも念じていることは、『耕人塾』のテーマでもある「世界に誇れる石巻地域」にしたということ。そのためには、自分の志を高く持って努力することと、多くの人たちと力を合わせるのだと思っています。『耕人塾』で取り組んでいる「あいさつ・清掃・ゴミ拾い」の実践活動がマスコミにも取り上げられ、多くの市民が協力してくれるようになりつつあります。これも塾生の皆さんのひたむきな活動のたまものだと思います。特に、今年度の「プロジェクトK」では、「ポイポイ捨てずにホイホイ拾おう」のポスターや手作りゴミ箱を持って取り組んだ川開き祭り当日のゴミ拾いは、ゴミを介して心の交流も生まれるなど新たな学びを得ることができました。2020年には東京オリンピックが開催されます。東日本大震災最大の被災地である石巻では聖火のスタートを提唱しています。その時には国内外から多くの方々が石巻地域を訪れます。その時までには、「世界に誇れる石巻地域」をつくっていくために『耕人塾』から行動で発信していきたいと思っています。「念ずれば花開く」、志を高く持って頑張っていきましょう。

「二十四節気」について

二十四節気は、季節の節目を示す言葉で、一年を二十四に等分したものです。「立春」から始まって、約15日ごとに名称が変わります。9月7日は「白露(はくろ)」、来週の23日は「秋分」で、昼夜の長さがほぼ同じになります。日が最も短い季節と比べて日の出が70分遅くなり、日の沈むのが85分早くなっています。夜の時間が2時間30分以上も長くなっているのです。そういえば、朝夕はめっきり涼しくなり、これまでは4時前には明るくなっていたのに、最近は5時にならないと明るくなりません。秋は「実りの秋」「食欲の秋」「読書の秋」といわれていますが、身も心も充実した秋にしたいですね。それには季節を楽しむことだと思っています。